

# 「相互交流的なコミュニケーション」を重視した表現指導のありかた

— 小学校・中学校コミュニケーション調査の結果に基づいて —

有 元 秀 文

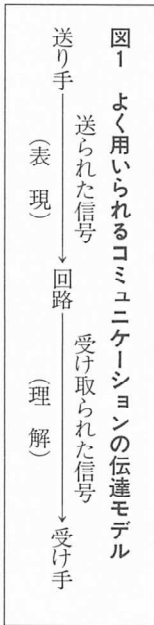
## 1 問題提起…これからの表現指導に求められるもの

これからの表現指導に求められるものは、「相互交流的なコミュニケーション」だと思う。「相互交流的なコミュニケーション」とは、一方通行でなく、双方向の活発な交流のあるコミュニケーションを意味する。例えば、生徒が教室で分かりやすく説得力のある意見を書いたり発表したり、積極的に質問や批判をしたり、建設的に討論を交わすようなコミュニケーションである。

「相互交流的なコミュニケーション」が必要な理由は、わが国の社会が急激に変化しているからである。沈黙や曖昧な表現を美德としていた社会が、自己主張や討論による合意形成の必要な社会に変化しているからである。その根拠は、新学習指導要領が音声言語教育を重視したことを初め、テレビの討論番組の増加、スピーチや対話や討論を重視した教育実践の増加、中学・高校生の全国的なディベート大会の開催、子供国会の開催など枚挙にいとまがない。また、後述するように、国立教育研究所が行った「コミ

ュニケーション調査」でも、子供達の論理的に表現する力が不十分で、対話や発表や討論のようなコミュニケーションに関心や自信がなく、教師の指導も十分でないことが明らかになった。

しかし、このような相互交流的なコミュニケーション観は、決して一般的なものではない。米国のワーチは、ここ数十年にわたって支配的だったコミュニケーションのモデルは、図1のようにコミュニケーションを「情報の伝達」としてとらえるモデルであると云う。(Wertsch, 1991)



この「伝達モデル」は、送り手が自分の考えを信号に翻訳して送り(表現)、受け手はその信号を解読してメッセージとして受

けとる（理解）というモデルである。このモデルでは、言語は思考や感情を伝えるパイプのような役割を果たしている。ワーチは、ソビエトのパフチンの見解に立って、このモデルがコミュニケーションを「対話」としてとらえていないことが問題であるという。パフチンによれば、理解とは受け手が発話の一語一語に対して反応する「対話」の過程なのである。（Bakhtin, 1986）パフチンは、「真の理解とは積極的に反応することだ。」と書いている。「話し手も聞き手がただ受け身に聞いていることなど期待していないし、話し手の考えを聞き手の心にコピーしようなどとは思っても及ばないのである。」つまり、コミュニケーションを単なる「情報の伝達」ではなく、話し手と聞き手との絶え間ない「相互交流」の過程ととらえたのである。

この「相互交流的なコミュニケーション」の一例は、米国のカリフォルニア州教育委員会で採択された、“English Language Arts Framework” (CSDE, 1987) に見られる。

◇ 読む活動は、語の意味を確認するだけでなく、作品の理解を深めながら活発な話し合いができるように支援しなければならぬ。書く活動は、読みやすさや技術だけに焦点を合わせるより、相手と目的に応じて、自分の思想を効果的に伝えるべきを教えるければならない。話すことと聞くことの活動は、生徒が積極的に文学作品や芸術との出会いを描写し、理解し洞察したことを活発な相互交流をとおして伝え合うようにしなければならない。

このようなカリキュラムは、米国のスピーチコミュニケーションの伝統を反映したものである。（有元一九九五a<sup>b</sup>, Arimoto

1997）わが国の国語教育を新しい時代にふさわしいものに変えていくためには、このような「相互交流的なコミュニケーション」を取り入れていく必要があると思う。（有元、一九九七c）つまり、本来は一体である「表現」と「理解」とを、別々に指導するようなカリキュラムや学習指導を改めていく必要がある。このような考え方に立ち、「コミュニケーション調査」の結果を資料として、これからの「表現指導」の在り方について考察したい。

## 2 コミュニケーション調査の概要

「コミュニケーション調査（一九九三―一九九六）」（有元、一九九六、一九九七a）の研究目的は、「国際化の進展と社会の変化に対応した、コミュニケーション技能の育成を目指す、カリキュラムを開発するための調査研究」を行うことにある。調査対象は、小学校調査では全国二八校の二五九七人の児童と七一七人の教師、中学校調査では四〇校の二六二八人の生徒と九五〇人の教師である。

この調査では、これからの子供達が身に付けてほしいコミュニケーションとして、特に、次の4点に重点を置いた。

- ① 状況と目的に応じて、読み手や聞き手の立場を考えながら、自分の考えを論理的に分かりやすく表現すること
- ② 論理的思考に基づいて、建設的かつ協動的に話し合うこと
- ③ 対話と話し合いによって相互理解を深め、よりよい人間関係を形成すること

④積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度

具体的な調査目標は、①教師の意識と指導の実態、②児童・生徒の意識、③児童・生徒の表現力の実態、④授業におけるコミュニケーション活動の実態、の4点である。

### 3 「児童生徒の表現力の実態」に関する調査で分かったこと

「コミュニケーション調査」の中で、先ず「児童生徒の表現力の実態」に関する調査を取り上げて「表現指導」のあり方を論じた。その概要は次の通りである。

#### (1) 調査のねらい

この調査のねらいは、スピーチで意見発表するときの原稿を書かせて、「積極的に分かりやすく説得力を持って主張する」コミュニケーションの技能が身についているかどうかを調べることにある。そのために、クラスでスピーチをするときの発表原稿を書くという課題を設定した。特に意見発表力に焦点を合わせた理由は、これからの時代は自分の意見を積極的に主張しなければ生きていけない時代であると考えたからである。

#### (2) 調査対象と調査問題

調査の対象は、小学生二七六人、中学生二七七人である。調査問題は次の通りである。

【問題】・あなたのクラスで意見発表会をすることになりました。

・クラスのみんなに話すつもりになって、下の題の中から一つ選んで、発表原稿（発表のための作文）を書いてください。

- ① 学校の図書館にマンガをたくさん置くことに賛成ですか。
- ② 小学校の授業でも英語を教えた方がよいですか。
- ③ 学校が全部の土曜日に休みになることに賛成ですか。
- ④ 医学のために動物実験をすることはよいことだと思いますか。

- ⑤ 大人になったら都会といなかのどちらに住みたいです。
- ⑥ 外国の安い米をどんどん輸入した方がよいと思いますか。

(3) 「意見発表の原稿」を分析して分かった、児童生徒の「表現力の実態」

この「意見発表の原稿」を分析し、小学校調査と中学校調査を比較した結果、子供達の表現について次のようなことが分かった。

① 分かりやすい文で書けるか。

文が分かりにくくは自分の考えを伝えることはできない。「分かりやすい文を構成する力」は、双方向のコミュニケーションが成立するための基礎である。この「分かりにくい文」とは、①主語・述語の不完全な対応、②主語・述語・修飾語などの欠落、③助詞の不適切な用法、④不必要に長い文、⑤助詞の欠落の5点である。

表1は、スピーチ原稿に現れた、これらの「分かりにくい文」の比率を、小学生と中学生で比較したものである。

表1 分かりにくい文のある回答

問 題 点	小 学 校				中 学 校		
	全体 276人	4年 85人	5年 93人	6年 98人	全体 277人	1年 137人	2年 140人
①主語・述語の不完全な対応	26%	24%	35%	18%	27%	33%	21%
②主語・述語・修飾語などの欠落	19%	21%	24%	12%	18%	21%	16%
③助詞の不適切な用法	18%	27%	24%	8%	11%	17%	5%
④不必要に長い文	11%	16%	10%	7%	12%	18%	7%
⑤助詞の欠落	8%	9%	10%	5%	6%	9%	3%
分かりにくい文のある回答	78%	81%	84%	70%	74%	82%	67%

これらのうち一つでも「分かりにくい文」のあった児童生徒は、小学生では78%だが中学生でも74%あって、中学生になってもほとんど改善されない。

「分かりにくい文」の中で、一番多いものは「①主語・述語の不完全な対応」で、小学生は26%だが中学生も27%いる。「主語・述語の不完全な対応」の70〜80%は、次のように「主語と述語がねじれた型」である。

例1 《主語と述語がねじれた型》

学校が全部の土曜日に休みになることに、僕は賛成です。理由は、友だちと遊んだり、家でのおんぴりできるから全部の土曜日が休みになるのに賛成です。(中学2年男子)

「理由は」が主語なら、述語の部分は「友だちと遊んだり、家でのおんぴりできるからです。」になるはずである。ところが、この文では「賛成です。」が述語になっている。

表2は、回答者の中での、例1のような「主語と述語がねじれた文」を書いた生徒の比率である。小学校でも中学校でも約5人に一人が「ねじれた文」を書いていて、中学校に進学しても大きな改善が見られないことが分かる。

次に多いのが「②主語・述語・修飾語などの欠落」で、小学生・中学生ともに20%近くいて、中学に進んでも一向に減らない。「③助詞の不適切な用法」だけはやや減っているが、「④不必要に長い文」や「⑤助詞の欠落」は小学校と中学校で大差なく

表2 主語・述語がねじれた文を書いた生徒の比率

	小 学 校				中 学 校		
	全体	4年	5年	6年	全体	1年	2年
	71人	20人	33人	18人	74人	45人	29人
主語と述語がねじれた型	18%	17%	32%	9%	20%	24%	15%

現れている。要するにほとんどの「分かりにくい文」は小学校でも中学校でも同様の比率で現れる。

なぜ小学校と中学校で差が見られないのだろうか。まず推測できることは、中学生になつて思考が複雑になつたために、文も複雑になり混乱するのではないかということである。もちろん、そう考えられる例もある。しかし、中学生の書いた分かりにくい文を調べると、小学生のものと同様に大きな違いがないものが多い。つまり、基本的な言語技術が身につけていないと考えられるのである。この結果から、小学校でも中学校でも分かりやすい文を書くための言語技術の指導が徹底していないということが推測される。

②分かりやすい構成で書けるか。

状況や相手によつて一概には言えないが、意見発表のスピーチをするという状況なら、一般的には冒頭に「主張」があつた方がよい。次に、なぜそんな主張をするかという理由がほしい。最後にもう一度結論としてまとめがあると、分かりやすく聞き手の印象にもよく残るだろう。つまり、意

表3 分かりやすい構成で書けるか。

構成の類型	小 学 校				中 学 校		
	全体	4年	5年	6年	全体	1年	2年
	276人	85人	93人	98人	277人	137人	140人
1 主張、理由、結論	47%	39%	44%	58%	37%	40%	34%
2 主張、理由	21%	27%	23%	15%	40%	39%	41%
3 その他	32%	34%	31%	27%	23%	21%	25%

見発表の場合、一般的には「主張、理由、結論」という構成が、最も分かりやすい構成と考えられている。

表3は、小学生と中学生がどのような構成で書いたかを調べたものである。

「主張・理由・結論」という分かりやすい構成は、小学生では学年が上がるにつれて増えて、6年生では58%になる。しかし、中学生になると1年では40%、2年では34%とだんだん下がってしまうのである。

一方、「主張・理由」という構成は、結論の欠けた「分かりにくい構成」である。この構成を持った例は、小学校では学年が上がるにつれて減っていき、6年生では15%にまで下がる。しかし、中学生になると、この「分かりにくい構成」の例は、逆に増えて1年では39%、2年では41%になる。つまり、結論の欠けた「分かりにく

「構成」は、中学生では小学生の2倍に増えてしまう。文章構成から見ても、せっかく小学校で身に付けた「分かりやすく構成するコミュニケーションの技能」が、中学校では崩れてしまうようである。

### ③説得力のある根拠が挙がっているか。

「説得力のある根拠」に必要な条件は、一般的には次の3点であろう。第一には、「正確な事実に基づいた根拠」である。第二には「感情的な根拠」でなく「論理的な根拠」である。第三には、「個人的な目先の利害に基づいた根拠」でなく「だれにでもあてはまるような本質的で普遍性のある根拠」である。このような根拠を挙げるためには、ふだんからよく情報収集して、よく考えて、考えた結果を積極的に発表して、討論を通して批判に答えるような、音声コミュニケーションを主体にした学習活動が必要である。だから、スピーチや討論やディベートを積極的に取り入れているクラスの子供は、他の批判に耐えられる説得力のある根拠が挙げられるはずである。

ところが、表4のように、「学校週五日制」に関する根拠を見ると、小学生と中学生が全く同じ根拠を挙げている。しかも、「遊ぶ時間が増えるから」とか「他の曜日の時間割がきつくなるから」のような現実的な意見が多い。「だらけてしまうから」のような個人的で感情的な意見も多い。また、個々の回答を読むと読書・新聞・テレビなどから情報収集した形跡のあるものは稀である。また、発表や討論を通して自分の考え方を磨き上げた形跡も、稀にしか認められない。つまり、情報収集や本格的な議論に

表4 「学校が全部の土曜日に休みになることにさんせいですか。」の根拠

	順位	賛成意見の根拠	人数
小学生 (51人)	1	<u>遊ぶ時間が増えるから</u> ……………	24人
	2	体や心を休められるから ……………	17人
	3	家族と過ごす時間が増えるから ……………	12人
中学生 (103人)	1	体や心を休められるから ……………	45人
	2	家族と過ごす時間が増えるから ……………	36人
	3	<u>遊ぶ時間が増えるから</u> ……………	32人
	順位	反対意見の根拠	人数
小学生 (14人)	1	<u>他の曜日の時間割がきつくなるから</u> ……………	8人
	1	勉強が遅れるから。 ……………	8人
	3	だらけてしまうから。 ……………	5人
中学生 (22人)	1	<u>他の曜日の時間割がきつくなるから</u> ……………	10人
	1	勉強が遅れるから ……………	10人
	3	だらけてしまうから ……………	9人

耐えるような根拠は極めて少ない。

④どんな文章が説得力があるか。

①から③までに挙げた、「文・文章の構成」「論理的で普遍性のある根拠」は説得力のある文章を書くための重要な必要条件である。しかし、これらの条件がすべて整った聞き手を説得することができようか。多くの回答の中には、これらの必要条件を備えているのに説得する力の弱いものが少なくない。これらの言語技術は、効果的で説得力のある表現に必須の前提である。しかし、言語技術だけで他を説得することはできない。なぜなら表現の目的は人の心に訴えることにあるからである。心に響かない表現が人を説得することはできない。小学校調査と中学校調査のすべての回答について、複数の分析者が共通して「説得力がある」と判定した回答から、次の六項目の要因を抽出することができた。

これらに共通するものは、「かけがえのない子供の個性が強く表れていること」である。

【「説得力のある表現」の要因】

- a 主張が明確で首尾一貫しているもの
- b 率直な自分の思いを自分の言葉で語っているもの
- c 自らの体験に基づいた、自分にしか言えない生き生きとした具体例が挙げられているもの
- d 様々な側面から、よく自分で時間をかけて自分の問題として考えたもの

e 積極的に関心を持って収集した豊かな情報をもとに論じてい

るもの

f 自分の思いを大切に、率直に社会や学校を批判したもの

4 児童生徒の意識

児童生徒は「コミュニケーション活動」について、どのような意識を持っているのだろうか。「コミュニケーション調査」で児童生徒に質問紙による意識調査を行ったところ次のようなことが分かった。

(1) 友達や先生との相互交流ができるか。

- ・「友達との会話で、自分の考えを止しく伝えること」に自信がある小学生は24%だが、中学生では17%に減る。
- ・「友達との会話で、人の話をよく理解すること」に自信がある小学生は29%だが、中学生では19%に減る。
- ・「先生に対して分かりやすく話すこと」に「自信がある」小学生は6%だが、中学生でも4%とかなり低い。
- ・「先生の話聞いてよく理解すること」に「自信がある」小学生は16%だが、中学生では8%に下がる。

(2) 授業中のコミュニケーションに関心や自信があるか。

- ・学級活動の話し合いを好む小学生は20%だが、中学生は4%である。
- ・意見発表を好む小学生は14%だが、中学生は6%である。
- ・「授業や学級活動で、自分の意見を分かりやすく話すこと」に

自信がある小学生は15%だが、中学生では4%に減る。

### (3) どんな文章表現に関心があるか。

文章を書くときにどんなテーマで書きたいかを聞いたところ、次のことが分かった。

小学生の結果は、第1位「友だちと遊んだことについて」(35%)、第2位「家族旅行について」(30%)、第3位「遠足や運動会について」(23%)であった。意見文の話題についてはすべて下位で、「地球をきれいにすることについて」(17%)が最も多く、以下「世界の平和について」(8%)、「生き方について」(6%)である。

中学生の結果は、第1位「将来の夢について」(23%)、第2位「友だちと遊んで楽しかったことについて」(22%)、第3位「スポーツについて」(交換日記)(19%)であった。意見文の話題についてはすべて下位で、「地球をきれいにすることについて」(10%)が最も多く、以下「生き方について」(9%)、「世界の平和について」(7%)であった。

要するに、ほとんどの児童生徒は、友達や先生との交流に自信がなく、授業中のコミュニケーションについての関心や自信も低いことが分かった。特に、あらゆるコミュニケーション活動について、小学生に比べて中学生の方が自信や意欲が低いことが注目される。また、小学生も中学生も意見発表に対して関心が低いことが分かる。

積極的に意見発表をしない理由を尋ねたところ、小学生の37

%、中学生の52%が「答えが分からないから」と答えた。これは、知識を偏重する正答重視の学習と関連があるのではないかと考えられる。

### 5 教師の指導の実態

「コミュニケーション調査」の教師に対する質問紙調査で、「指導の実態」について尋ねたところ次のようなことが分かった。

(1) 「生活経験文」の指導を、「1学期に数回以上」行う教師は、小学校(73%)、中学校(25%)であり、小学校の方がはるかに頻繁に指導している。

(2) 「感想文」の指導を、「1学期に数回以上」行う教師は、小学校(64%)、中学校(49%)であり、小学校の方が頻繁に指導している。

(3) 「意見文」の指導を、「1学期に数回以上」行う教師は、小学校(36%)、中学校(36%)であり、小学校と中学校で差が見られない。小学校の中では最も頻度が低い。

(4) 小学校で「ほとんど指導しない」と答えた比率は、意見文(21%)、感想文(3%)、生活経験(2%)であり、意見文を指導しない教師が比較的多いことが注目される。

(5) 「1〜3行程度の文を書く」短作文指導を週に1回以上指導する教師は、小学校(71%)、中学校(40%)で、小学校の方が頻繁に指導している。

(6) 「スピーチで意見を話す」指導を、「1学期に数回以上」行う教師は、小学校(61%)、中学校(27%)であり、小学校の方



がはるかに頻繁に指導している。

(7) 文章を書くときに「構成メモ」を作る指導を、「数回に1回以上」指導している教師は、小学校(59%)、中学校(22%)と小学校の方がはるかに頻繁に指導している。

(8)「意見発表のときに必ず理由を言わせる」指導を「数回に1回以上」指導している教師は、小学校(81%)、中学校(65%)で小学校の方が頻繁に指導している。

要するに、作文やスピーチの指導の頻度も内容も、小学校の方が中学校より頻繁に指導していることが分かった。ただし、小学校で意見文を指導しない教師が多いことが注目される。また、小学校でも中学校でも頻繁に指導する教師と余り取り上げない教師の両極に分かれることが分かった。

## 6 結論・学習指導の内容と方法をどう改善したらよいか。

結論として、「相互交流的なコミュニケーション」を重視した表現指導を進めるための、改善の方策を提案したい。その「根拠」はすべて、本稿で論じた「コミュニケーション調査」の結果に基づいている。

(1) すべての授業に、口頭発表・スピーチ・話し合い・討論の時間を確保する。

根拠・小学校・中学校ともに十分普及しているとは言えない

状況である。

(2) 子供が自分の意見を発表することに、関心と意欲を喚起する教材を与える。

根拠・特に意見文の話題に関して、小学生も中学生も関心や意欲が低い。

(3) 読書や新聞・雑誌・テレビから情報を収集する学習を推進する。

根拠・小・中学生ともに、読書や新聞などからの情報収集を十分に行っていない。

(4) 分かりやすい文や構成で発表する言語技術の技能を指導する。

根拠・小・中学生ともに、文・文章を構成する技能が不十分である。

(5) 子供が自由に心を開いて率直に語る場面と雰囲気を設ける必要がある。

根拠・積極的に発表しないことと、正答重視の授業には関連

があると推測される。

### 参考文献

- 有元秀文(一九九五a)「自己実現」の道具としての、スピーチコミュニケーション技能の開発ーカリフォルニアの高校で見た討論の授業の会話分析、国立教育研究所研究集録第31号
- 有元秀文(一九九五b)スピーチコミュニケーション能力の育成をめざした国語カリキュラムの開発ーカリフォルニアのリキュラムとの比較研究、教科教育研究部紀要
- 有元秀文(一九九六)コミュニケーション調査「小学校調査報告書」、国立教育研究所
- 有元秀文(一九九七a)コミュニケーション調査「中学校調査報告書」、国立教

育研究所

有元秀文(一九九七c) オーストラリアの教室で見た、いじめ解消のためのコミ

ュニケーション技能の開発 国立教育研究所研究集録第35号

Arinoto, H. 1997. Multivoiced Situated Learning: Reconsidering

"Legitimate Peripheral Participation". Research Bulletin of the

NIER, No. 28

Bakhtin, M. M. 1986. Speech genres and other late essays, ed. Caryl

Emerson and Michael Holquist, trans. V. W. McGee. Austin:

University of Texas Press.

CALIFORNIA STATE DEPARTMENT OF EDUCATION. 1987. Eng-

lish Language Arts Framework for California Public Schools

Kindergarten through grade twelve

Wertsch, J. V. 1991. Voices of the mind: A sociocultural approach to

mediated action. London: Harvester Wheatsheaf.

(国立教育研究所教科教育研究部国語教育研究室蔵)